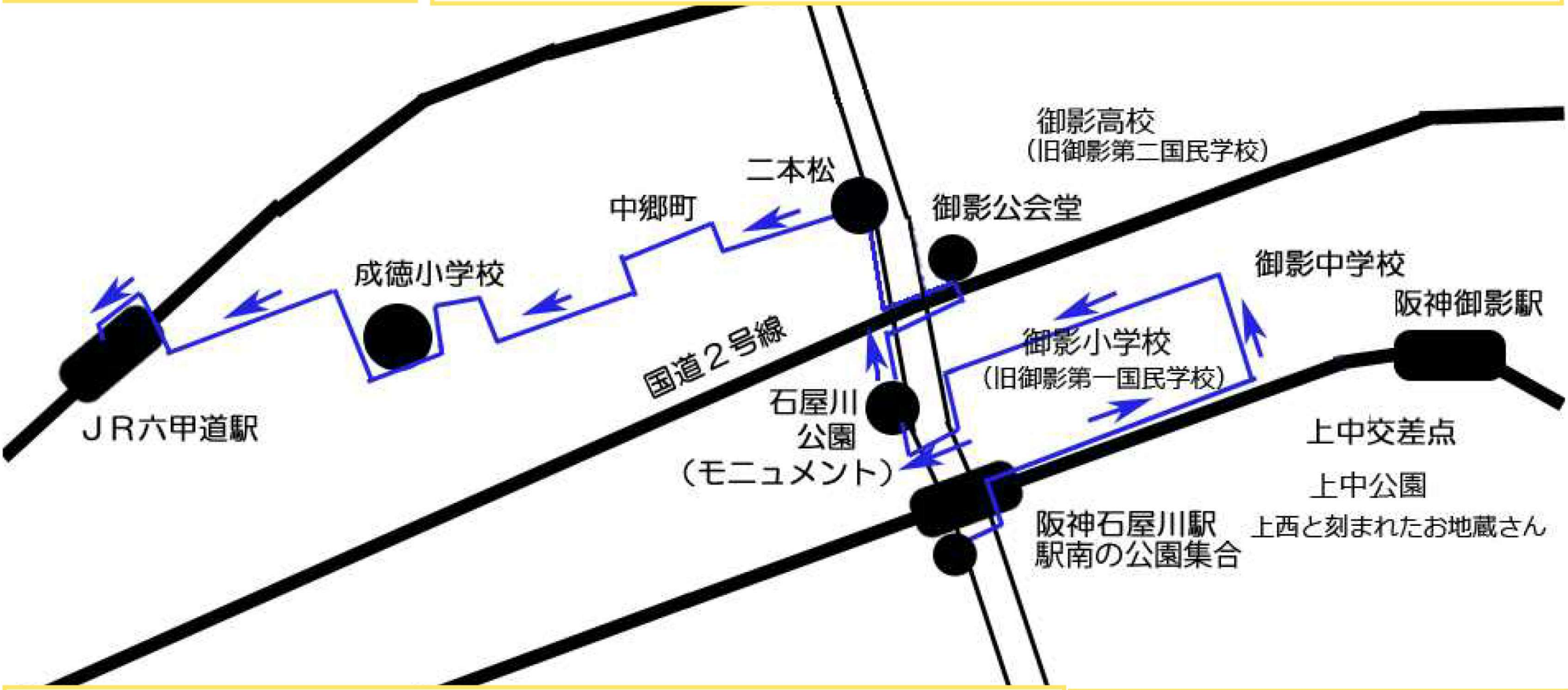
『火垂るの墓』ウォーキングマップ
―御影コース―

阪神石屋川駅 → 石屋川公園（火垂るの墓モニュメント）→ 御影公会堂 → 成徳小学校 → ＪＲ六甲道駅　約2.5km
（阪神御影駅からスタートすることもできます）

二本松　空襲のあと、別々に逃げた母親と落ち合うため、清太と節子は御影公会堂の裏手の「二本松」という松林に向かいます。現在も松並木が整備され、石屋川沿いに御影公会堂の側面・背面を望むことができます。

御影公会堂　御影町（後に神戸市に合併）の公会堂として、酒造家・嘉納治兵衛の寄付金を元手に１９３３年（昭和８）に建設された建物。空襲にも阪神･淡路大震災にも耐えて残った近代建築遺産として、２０１７年にリニューアルされました。『火垂るの墓』にも、一面焼け野原のなか、公会堂がぽつんと立っている様子が描かれています。

設計者清水栄二は当初神戸市営繕課所属、後に独立しました。旧魚崎町役場（現・魚崎地域福祉センター）も清水の作品です。



成徳小学校　清太と節子の母親が、大やけどを負って運び込まれ亡くなった学校のモデルになった小学校。小説のなかでは「御影国民学校」という設定になっていますが、アニメに描かれた校舎や校庭のモデルになったのは、野坂さんの出身校である成徳小学校（成徳国民学校）です。

〔野坂昭如さんの実体験〕小説『火垂るの墓』は、野坂さんの実体験をベースに書かれたフィクションの作品です。自伝『ひとでなし』（１９９７）などによると、野坂さん出生後に実母が亡くなり、野坂さんは母方の叔母の嫁ぎ先である張満谷（はりまや）家の養子となります。ＪＲ六甲道駅北側の永手町（六甲小校区）から、新設校の成徳小に進学するため中郷町に転居し、ここで１９４５年６月５日の空襲に罹災します。石油会社に勤めていた養父は空襲で行方不明となり、養母は大やけどを負って成徳国民学校に運び込まれますが、さいわい小説とは異なり亡くなることなく、西宮の回生病院に収容されたのち快復されました。野坂さんは幼い妹（空襲時生後１年２か月ほど）とともに西宮のニテコ池南に住む親戚を頼り、さらに知人の縁で福井県春江町（現坂井市）へと避難しますが、ここでも食糧事情は悪く、妹さんは亡くなります。こういった体験が、小説『火垂るの墓』のモチーフとなりました。

石屋川公園　火垂るの墓のモニュメントがある石屋川公園は、阪神･淡路大震災後に整備された防災機能を持つ施設です。空襲を避けて清太と節子が逃げた海岸近くの酒蔵地帯は、この石屋川のさらに下流の場所にあたります。

上中（うえなか）交差点・上中公園　小説のなかで、御影公会堂の西側の二本松に清太と節子が逃げたとき、警防団の男性が上西、上中、一里塚という町名の住人に呼びかけます。このうちの上中が、交差点や公園の名前として残っています。清太たちは、この３つの町のうちのどこかに住んでいたという設定のようです。

マップ作成：「火垂るの墓を歩く会」実行委員会（2025年2月作成）
（※このマップは、野坂昭如さんの小説『火垂るの墓』（新潮文庫刊）を参考に、作成させていただきました。）
野坂昭如「火垂るの墓」（新潮文庫刊『アメリカひじき・火垂るの墓』所収）　定価693円（税込）